

中屋先生の薫陶が速読術に

第21期 波多野 健（1973年卒業）

英語が苦手だったのに、どうしてアメリカ科に進んだのか？ 単に法学部へ行くのが性に合わないというだけだったのか？——藤田文子先生にお答えしたように、本当に1920年代という時代を研究してみたかったのか、今となっては何とも言い難いという感じです。

「英語が苦手」というのは、中・高校での英語学習のように、知らない単語があるとかそまじめに辞書を引き、じっくりと構文から読み解いていくという時間のかかるスタイルの者が陥る自然現象だったと後で悟りました。

実際、中屋健一先生のアメリカ史の授業は、あの分厚いアメリカの歴史教科書を毎日2章ずつ予習して行って、毎回テストがあるという他所ではなかなかお目にかかれない凄い代物だったのです。

アメリカの大学は学部の人に猛勉強させられ、卒業するのも大変だ、留学するなら大学院の方がずっと楽だ——と、昔は誰もが言っていました（近頃あまり聞かなくなったのは、アメリカの大学院へ行って学歴ロンダリングした文化人や政治家が増え、マスコミにとって「不都合な真実」になったせいかな？）。私たちが在学時に中屋先生から受けたアメリカ史の授業はそうしたアメリカの学部教育のミニチュア版でした。

そうすると、スピードもさることながら、内容が100%は解らなくても、とにかく読み込んでテストに対応できるくらいには疑問点を残さない理解をしておくしかない——そういう読み方ができるように体質改善をせざるを得ないわけです。それが、卒業後の人生にボディーブローのように（但しプラスの）影響を及ぼしたように思います。

卒業後10年たって、民間会社のニューヨーク駐在員となり、treasurer & secretaryとして訴訟の担当窓口になりました。受け取った訴状を一時間以内に読んだ上で顧問弁護士のところへ相談に行き、弁護士が推奨する対応策を本社法務部へ報告・提案するわけですが、アメリカ史の授業よりはずっと楽ですし、そう苦にもなりません。それがまた、帰国後、英文契約をサイドワーク的に担当し続けることに繋がりました。今から思うと出発点はあのアメリカ史の授業だったと痛感します。退職後一年ほどたったあとで、元の会社からアメリカ資本とのジョイント・ベンチャー契約の交渉をしてくれないかという話が舞い込み、現在、月に1~2日ほど「アドバイザー」として出社しています。

その他、ボランティア活動として、市の広報誌の重要記事を英語・中国語・

韓国語に訳した隔月誌の編集・翻訳に携わっています。

もう一つ、趣味と実益を兼ねた副業として、日本未紹介の英語の推理小説を翻訳しています。先人が見落として本邦未紹介となったままの英語の推理小説から佳作・傑作らしきものを発掘するのです。出版社に持ち込み私自身が翻訳をして、刊行を働き掛けるのですが、めぼしい作品はたいてい訳されていますので、未訳の傑作を発掘するとなると作業量が大変になります。ここ数年は、インターネットが発達して、欧米の図書館に秘蔵されていた稀覯本がネットで読めるようになったので、落ち穂拾いがずいぶん効率的になりました。今では、ネットでまず候補となりそうな作品をチェックし、あとは古い原書を手に入るか、ネットにアップされている書影を検索して片っ端から読むという手順です。

これまでに私が商業出版できたのは3冊です。まず、インド駐在時代にムンバイの書店の新刊書の棚から発掘したインドの現代ミステリー、カルパナ・スワミナタンの長編『第三面の殺人』（講談社、2010年6月刊行）。この内容を日本のサイトに紹介したところ、島田荘司氏の目にとまり、講談社の「島田荘司アジア本格リーグ」というプロジェクトが目の目をみるきっかけになった点でラッキーでした。

次に、先人が見落とした欧米の古典ミステリーとして、アメリカの19世紀末～20世紀初の女流ベストセラー作家、アンナ・キャサリン・グリーンにあまたの短編の中から、現在でも通用する5作を探し出して編んだ短編集『霧の中の館』（論創社、2014年1月刊行）。「アンナ・キャサリン・グリーンの長篇は冗長だというイメージが先行していますが、中短篇ではそうした欠点はまるで見られません。アメリカン・ゴシックの流れに棹さし、幻想怪奇味が濃厚なサスペンスの醸成にこれほど長けた作家だったのかと目からうろこが落ちる思い」という好評をミステリー評論家筋から得て、2014年末の早川書房のベスト10投票でも2人の投票者が推してくれました。

第3作は、2017年10月に上梓したファーガス・ヒュームの中短編集『ピカデリーパズル』で、表題作はじめ、短めの長編から短篇まで5作を収めています。うち1つは、2006年に訳して同人誌に発表した短編でアメリカ出張時にニューヨークの書店の新刊書の棚で見つけたものですが、中・長編2作と短編1つはインターネットで古書を購入し、あと1つの短編は、ようやくネットで書影を手に入れたものです。亀井俊介先生にお届けしたところ過分なお褒めの言葉と激励をいただき、穴があれば入りたい気持ちです。

しかし、これもまあ中屋先生のアメリカ史の授業で英語の体質転換が出来たからこそなのですが。